

3. 労働と社会

人間と人間との関係

今回の課題

- ✓ 人間社会の特質, および社会形成の発地点を明らかにする
- ✓ 物質代謝の社会的運営としての経済活動の基本的なカテゴリーを明らかにする

今回のキーワード

- ⊕ 本能と自覚
- ⊕ 人間社会と動物集団
- ⊕ 協業・分業

今回の内容

- ▶ 労働による社会形成
- ▶ 社会システムと生産関係
- ▶ 社会の再生産

協業

- =労働において人間は, 他の人間と協力
- 個人の能力の限界
 - そもそも一人ではできない労働がある
 - 一人でやるよりも多数でやる方が効率的
 - ↓ こうして
 - 社会形成の必要性
 - || すなわち
 - 物質代謝の社会的運営

労働による社会形成

- 労働は意識的活動だから, 協力も意識的
 - 言語的コミュニケーション
- 動物の本能的な集団形成 vs. 人間の自覚的な社会形成

生産関係

= 社会的生産における経済的な社会関係

- 最も根本的な社会関係
- その社会の性格を決める

多様な欲求vs.限りある能力

- 個人の欲求は多様である
⇕ しかし
- 現実の個人の労働能力は限られている
↓ そこで
- 社会が解決

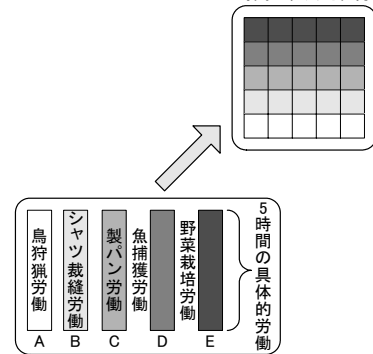
社会的分業

= 多様な欲求に対応する,
多部門への労働分割

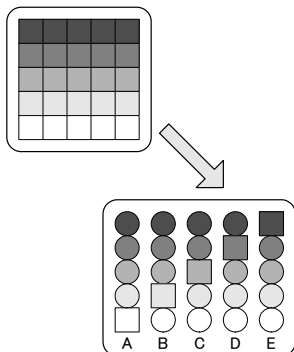
- 個人の能力は限られているが,
社会をつうじて多様な欲求を充足する。
- 社会的分業の中で労働の変換が行われる。
- 市場社会では商品交換を通じて実現される。

生産(変換前)

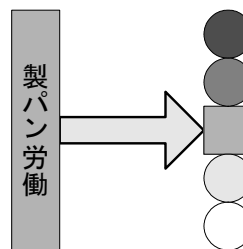
25時間の社会的総労働



分配(変換後)



パン生産者の例



- 一種類の労働しかしていないのに、5種類の労働の成果を享受
- 変換の前後を通じて、5時間分の労働コストには変わりはない
- 社会というフィルターを通して労働の変換が行われた

生産手段と消費手段

- 富(=総生産物)の二つの区分

1. 生産手段

= 資本財

- 消費手段を手に入れるための手段

2. 消費手段

= 消費財

- 経済活動の最終目的

生産手段	ハサミ 綿布
消費手段	シャツ

サープラス

=一日の生活に必要な消費手段, および,
そのために今日使われた生産手段
を越える部分

- 生産の拡大に使うことができる。
- コスト削減すればするほど,
増やすことができる。

剰余生産物と剰余労働

1. 必須生産物と 剰余生産物

- 新生産物の二つの区分
- 必須生産物の消費によって社会の労働力が再生産される

2. 必須労働と剰余労働

- 新労働の二つの区分

補填部分 生産手段の	必須生産物	新生産物	総生産物	旧労働	
				必須労働	新労働
				剰余労働	

社会の年間再生産

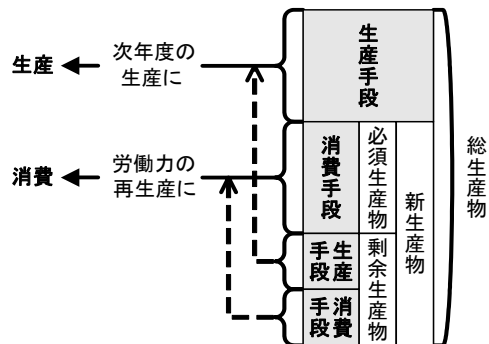
一年間の社会の総生産物

=今年度中に使われた分を補填する分の
生産手段

+社会の構成メンバーが生活するための
消費手段

+余りの部分(サープラス)

年間総生産物の構成部分



今回のまとめ

- ❖ 動物は本能的な集団形成
人間は労働を通じて自覚的な社会形成
- ❖ 生産関係は最も基本的な社会関係
- ❖ 社会的分業は労働の変換のシステム
- ❖ 社会の総生産物は,
・生産手段の補填分,
・必須生産物,
・剰余生産物
からなる